

えつつあり、その成果は着実に積み重ねられてきている。しかし医薬史の分野は歴史を扱いながらも、医学・薬学という高度な学問と関連があるがために、世間では間口が狭い、あるいは敷居が高いとみなされている。一旦踏み入れればあれもこれも調べてみたいという、実に豊かな世界であるにもかかわらず、である。私の勤務する内藤記念くすり博物館でも、開館以来、なんとか医薬史に身近なレベルで接することはできないか、苦心を重ねてきている。ところが来館者の中には、「医薬」というだけで身構えてしまう方も多く、展示室を見て初めて、「富山の薬売りさんほうちに来ていた」とか「この薬はおばあちゃんが使っていた」とうちとけてくださるのである。

また、アメリカでは教科書に薬の使い方の項目があるが、日本では医薬について学校で習うことはほとんどなく、親の見よう見まねに負うところが大きい。家庭医学の本にも一般的な薬の使い方しか書かれていないため、自分や家族の使っている薬が、なぜ効果があるのかとか、どんな歴史を持った薬なのか、全く知らないまま用いている人も多い。

本書は、このような現代にあつて、伝統的で、なおかつ現在も愛用されている「名薬」を題材に取り上げること、薬について知る楽しさを紹介してくれた、ということができよう。しかも一般の読者には間口を広く取り、専門家には奥行きを広く、と実に行き届いた構成である。奇しくも故・宗田一先生のご著書と同じタイトルとなったが、「日本の名薬」を

知り、調べ、伝えていくことは、あたかもリレーのような作業であると思われた次第である。

なお、著書は、「まえがき」でも述べているように、伝統薬やその製法などを「文化遺産」と呼び、更に調査続行中である。井上目洗薬など、多くの伝統薬が消えつつある現在にあつて、次回作でも、伝統薬の存在意義を問い、示すものであつてほしいものである。

(青木 允夫)

〔東洋経済新報社、東京都中央区日本橋本石町一―一―、電話〇三―三二四六―五六一―、平成十二年十月十二日、A五判 二九三頁、本体価格一五〇〇円〕

D・フロリー、V・ラッド 著

『アーユルヴェーダのハーブ医学』

本書はデイヴィッド・フロリー氏とヴァサント・ラッド氏の共著の翻訳に上馬場和夫が現代医学の立場から活性成分とその作用及び現在報告されている副作用とつけ加えた形で構成されている。全体の構成は前半の一章から九章までがアーユルヴェーダの基礎理論、後半の九章までがアーユルヴェーダの基礎理論、後半の九章がハーブの各論となっているが、各論では一般的ハーブ二種とアーユルヴェーダの特徴的ハーブ三種に分けられ効能及び用法が紹介されている。一般的なハーブではアロエ、カモミール、カルダモンなどごく

一般的なハーブをアーユルヴェーダの見地からその用法を解説している所に大きな特徴がある。また各論全体を通して、漢方の常用薬物、例えば桂枝、麻黄、地黄、甘草、朝鮮人參、生姜、艾葉、山薬など多く含まれているので漢方薬的な使用法とアーユルヴェーダの効用とを比較できるのもおもしろい。

日本ではまだ西洋薬が圧倒的シェアを占めているが、世界的見地に立てば、西洋薬のウエートは高々二割にすぎない。約八割は薬草を中心とする自然薬である。その理由は高価格、技術者不足、文化度の低い地域が多いこととさまざまであるが、最近ではヨーロッパ、アメリカにおいてもWHOの活動や代替医療の広まりとともに薬草療法の見直しが行われている。地球資源が限られている中で、循環可能な資源は植物しかないのであるから、この方向は好ましいものと言える。現在WHOの活動の一つとして、薬草の世界的基準を作ろうとしているがその歩みは遅い。同じ薬草でも地域や民族によつて異つた効用や用法があるので、一つの薬草を世界的視野で見るとは大へん意義深い。そこには古くからある薬草に新しい使用法がでてくる可能性が高いからである。そのような意味で日常よく用いられるハーブや漢方薬をアーユルヴェーダの見地から比較することのできる本書の価値は高い。おしむらくは漢薬名の同定が可能なものには漢薬名を付けていただいた方がよかつたと思う。これは本書に限らず一般的な問題点であるが、本書の題にもなっている「ハーブ」と

いう言葉に専門的な定義がなされないまま一人歩きしていることである。起源は『聖書』のラテン語訳の *herba* であつたと考えられ、もともとは地中海沿岸の草本系植物の地上部を意味していたようであるが、今では薬草、薬木、香辛料を中心として果実や野菜の一部まで含んだ解釈がなされている。この辺で一考してはと思う次第である。

出帆新社はインドものなら損得かえりみないユニークな出版社である事を附記しておく。

(根本 幸夫)

〔出帆新社、世田谷区経堂二―二四、電話〇三一三四三九―〇七〇五、平成十二年五月一日、A五判、四三五頁、本体価格四〇〇〇円〕

森川 政一 著

『昭和前期上越医界史』

著者は明治中期に創立した新潟県下私立病院の名門知命堂病院理事長であり、外科の俊秀として名声をほしきままにした臨床医の学究である。

すでに、『知命堂百年史』『知命堂病院附属産婆看護婦養成所史』『明治・大正上越医界史』の名著があり、既刊の『高田市医師会史』(一九九八年)・『糸魚川市西頸城郡医師会史』(二〇〇一年) 編纂の顧問として実質的な指導をしてきた、地方医事史研究の実力者である。知命堂病院はウイリス